

# 大東亞戦争の災禍を語り継ぐ活動に欠けるものは何か

伊藤 秀二 陸自69

毎年8月15日前後になると、先の大戦にまつわる負の遺産が、過去の過ちを再確認するがごとく、新聞やテレビで連日のように報道される。

近年の特色は、特攻に関するものを典型的な例として、全国各地で「戦争の惨禍を風化させるな!」をスローガンとする草の根の語り部的な活動が主体をなしているように見受けられる。

小生は、これまでにこの種の催しに数回参加したが、最近の活動は、昭和の末期から平成の初期頃までは多々見られた左翼思想団体のものに比して、明らかに客観的事実に近い内容になっているように思われる。誠に結構なことである。歴史的事実に基づかないものは、現代はもちろんのこと、後世にも百害あって一利なしと思われるからである。

このような反面、この種活動を耳にするに付け、活動の目的を達成して平和で豊かな日本を築いてゆくことと、そのために重要な国の防衛・安全保障政策との整合性が取れているのだからかとの疑念がいつも小生の脳裏を掠め

るのである。

子細に申せば、活動が一般市民や養育途上の子供達に対する単なる反戦啓蒙運動に陥って、国の防衛努力を軽視することに繋がってはいないか、ひいては反対思想を植え付ける結果になってはいないかと危惧するのである。

更にはこの種活動の根源的な事項である、日本を再び戦争に導かないためには、日本人が経験した過去の戦争災禍を語り継ぐのみでよいのか、欠けるものはないのかを問いたいのである。

結論的に述べると、一億総国民が力を合わせ、この日本国を自由と民主主義を基調とした国家として創造する努力こそが、先の大戦のような惨禍を未然に封じ込めるために極めて重要なことではないか。

すなわち戦争の災禍を語り継ぐ活動においては、一般市民や子供達、とりわけ将来を担う子供達に、自由が制度化された民主主義国では「国民に主権」があり、選挙で選ばれた代表を通じて自らの政治的な願いを表すことにより、国の守りを固めつつも、国民不在の理不尽な戦争を防止できることを教えてほしいのである。そして近い将来に選挙権を取得したならば、必ず選挙に行くように諭していただきたいのである。